

## 分野横断型地域連携活動の実践と学習効果

### Practice and Learning Effects of Cross-sectoral Regional Cooperation Activities

西 晃平・谷口 美佳・前田 明美・谷 明日香

Kohei NISHI, Mika TANIGUCHI, Akemi MAEDA, and Asuka TANI

本稿は、複数の専門領域を横断的に学習するカリキュラムをもつライフデザイン学科において試みた分野横断型の地域連携活動の内容と、それを通じた学生の学習効果を報告することを目的としている。本活動では、児童養護施設の児童を対象に、本学のCOCOROEポタジェプロジェクトで栽培されたさつまいもを用いて、さつまいもの実、葉や茎を活用した芋版によるサコッシュ装飾、さつまいもの蒸しパン調理、さつまいも澱粉による糊の作成とオーナメント制作を試みた。活動を通して短大生のジェネリックスキルの変化を検討した結果、活動を繰り返すことにより能力は上昇する傾向にあることが確認された。分析結果からは、活動の回数を重ねることで親和力が有意に上昇することや対自己基礎力は対人基礎力と相乗的に上昇することが示唆された。

キーワード：地域連携活動、分野横断型学習、児童養護施設、ジェネリックスキル

#### 1. はじめに

昨今、社会情勢の変化と共に、大学に期待される役割も変化してきている。中央教育審議会は、大学に期待する役割として、「教育・研究に加えて、社会貢献（地域社会・経済社会・国際社会など、広い意味での社会全体の発展への寄与）が大学の『第3使命』に位置付けられる」と述べている<sup>1)</sup>。大学における教育・研究活動の資源や成果が社会に還元されることはもちろんであるが、短期大学部においては、特に、地域との連携活動を強め、活動の輪を広げていくことが、継続的な定員確保と地元就職につながる対策になり得るものと考えられる。さらに、阿部は、今後の短期大学の発展には、地域というカテゴリーを超えて、専門領域というカテゴリーの中に連携を広げていくことを提案している<sup>2)</sup>。つまり、地域との連携活動においては、地域とどのような連携活動をするのか、その内容について深め、広げていくことが重要である。このことを短期大学部ライフデザイン学科（以下、本学科）の学生の視点に置き換えると、学びの場を地域に広げる段階で、学科内の専門領域を横断させた学習に発展させていくことが大切だと換言することができる。

吉田、谷口は、2017（平成29）年度より、学部横断型の学習として、学生（短期大学部生活ナビゲーション学科）と教職員（教育学部・短期大学部）が協働し、児童養護施設に入所する子どもを対象とした余暇活動支援（習い事の機会の提供）の一つとして「料理教室」事業に取

り組んできた<sup>3)</sup>。その結果、活動を通して、学生は授業で学んだ知識や技術を実践的に活用する機会となると同時に、自発的な学習を促す動機となったと結論づけている。しかし、活動内容としては、料理教室というフード分野に特化した内容であり、上記に述べた専門領域の横断させた学習には至っていない。また、谷は、2019（平成31）年度に、地域連携型の学習として、衣服のリサイクル率の低さに着目し、大学近隣の幼稚園と連携した衣服アップサイクル活動を実施した<sup>4)</sup>。その結果、個人の学びを活かし地域の方と一緒に社会・環境問題について考え行動に移す活動となり、活動に関わる人の輪がクラスメイトに加え地域の人に広がり協働していく中で、個人の能力が高まっただけでなく、チームで取り組むことが相乗的に個人の能力を高めるなどのジェネリックスキルが高まるときの一傾向が示された。しかし、この活動も地域連携活動ではあるが、ファッション分野に特化した内容であった。一方、谷は、2017（平成29）年度に、分野横断型の学習として、様々な分野を中心に学ぶ学生に広く声をかけ、羽曳野市の特産品であるぶどうを題材にした染色実験を試み、さらに染色した布で衣装を製作する活動を試みた<sup>5)</sup>。ファッションショーの実施は、衣装ばかりに着目されがちだが、実際には、ぶどうを活用した衣装製作（ファッション分野・フード分野）だけでなく、ショーにおける広報活動（ポスター作成を含む）（デザイン分野）、台本作成、司会進行（情報・ビジネス分野）、ナレーションやBGM・照明の選定（インテリア分野）に加え、当日関わるモデルや会場への事前説明、具体的な計画・スケジュール管理の共有（情報・ビジネス分野）など多岐にわたる。そのため、様々な分野を主として学ぶ学生たちがそれぞれの知識・技能を総合化して協働で取り組む必要があった。活動を通して、学生は、相互に意見を出し合い、承認する（される）ことで大学での学びを活かし合う機会になり、こうした経験の積み重ねが自己肯定感の向上につながったと結論づけている。この活動では、専門領域の連携はなされていたといえるが、活動はあくまでも学内のものであり、地域連携活動とは言い難い。

本学科では、8フィールド（フード、ファッション、インテリア、トータルビューティ、ブライダル、医療事務、ビジネス・ICT、グローバルカルチャー）から学生自らが自分の興味・関心に従い、科目を選択し学習をするフィールド・ユニット制をとっている。そこで本取り組みでは異なる専門分野（フード、ファッション、インテリア、ビジネス・ICT）の教員が協働し、それぞれの分野を受講する学生とともに大学近隣に位置する児童養護施設高鷲学園（設置法人：社会福祉法人大阪福祉事業財団。以下、高鷲学園とする）に入所する児童と短大生の地域連携活動を試みた。ここでは、その内容と成果について述べる。

## 2. 活動の目的

本活動は、地域連携活動と専門領域の横断的学習を組み合わせ、分野横断型の地域連携活動を実施する。活動内容としては、本学の学生を主体とし、各専門領域をもつ教員とそれらの科目を受講してきた学生が協働し、児童養護施設の児童を対象に、調理やインテリア・ファッション小物の制作などの余暇活動支援を試みる。なお、活動に用いるさつまいもは、菜花園の維持管理を通して食育を学ぶことを目的とした本学COCOROEポタジェプロジェクトで栽培されたものである。

本稿では、活動報告に加え、活動を通じた学生の学習効果について、ジェネリックスキルの指標に明らかにすることを目的とする。

### 3. 倫理的配慮

本活動をととして、学生のジェネリックスキルの調査を実施するにあたり、参加は回答者の自由意志に委ねられており、未協力の場合に不利益となることはないことを担当教員より学生へ口頭で説明した。また、調査協力の同意については、アンケートの回答をもって得られたものとした。

### 4. 活動参加者

本活動は、2022年の冬学期に開講された本学科1年生を対象にした専門科目（選択）『ライフデザイン実践演習』の授業の一環として実施した。本学の活動参加者は、上記科目を履修する学生11名である。また、高鷲学園の活動参加者は、児童20名（中学生2名、小学生18名）である。

### 5. 活動内容

本活動の活動内容とその時期について、表1に示す。

#### (1) 活動前学習

2022年9月29日、『ライフデザイン実践演習』（木曜4限）の授業において、高鷲学園の職員の方より児童養護施設とはどのような場所か、また、高鷲学園の児童の生活についての説明を受けた。

#### (2) 活動①：芋版によるサコッシュの装飾

2022年10月22日、参加児童を10:00に大学（ライフデザインスタジオ）で迎え、11:30まで活動を行った。さつまいもは、2日前に事前に学生の手により収穫をしていたものを用いた。

##### a. さつまいもの収穫（事前準備）

本学のCOCOROEポタジェプロジェクトで栽培されたさつまいもを収穫する学生の様子を写真1に示す。さつまいもを掘る過程で、蔓の方向がさつまいもの存在を探るヒントになることやその蔓の長さ、多様なさつまいもの形状など、スーパーで販売されているさつまいもの背景と価格に含まれる労働力を体感する機会となった。さつまいもを収穫しながら、自然の作り出す収穫物の形状美に触れ、想像力を掻き立てられ、さつまいもの自然な形状を生かした断面や

表1 活動内容

実施日	活動内容
2022年 9月29日	活動前学習 児童養護施設について
2022年 10月22日	活動① さつまいもの芋版を使ったサコッシュ装飾
2022年 11月19日	活動② さつまいも掘り体験 さつまいも蒸しパンの調理
2022年 12月17日	活動③ さつまいも澱粉を用いたオーナメント制作
2023年 1月12日 1月19日	活動後学習 一連の活動の流れをパワーポイントにまとめる



写真1 さつまいも掘り体験の様子

葉や蔓を含めた形を芋版に用いることにした。

#### b. ベジタブル紙に芋版体験

市販のベジタブル紙を用いて芋版を行った。活動の様子を写真2に示す。このベジタブル紙は、和紙の繊維と芋のつるを混抄したものである。芋版体験では、20名の参加児童を5グループに分け、各グループに1枚ベジタブル紙(970×640mm)を配布した。インクは、市販のシルクスクリーンプリント用のインク(成分:合成樹脂)



写真2 芋版制作の様子

を使用した。使用インクの選定理由としては、色が豊富に用意されていることや乾燥速度が遅いことに加え、洋服や持ち物に付着した場合であっても水で洗い流せることなど、比較的取り扱いが容易であることがあげられる。学生は、インクのつけ過ぎを防ぐため、インクの入った紙皿にはスポンジが置いてあることや、押印する朱肉のようにスポンジを介してさつまいもにインクをつけることを児童に説明した。完成作品を写真3に示す。芋版の発色や色の組み合わせ、そして、芋版の力加減を確認しながら作業を進めることで、次のサコッシュの装飾へのイメージづくりの時間とした。完成した作品は、後日、事後の活動に用いるため、A4サイズにカットした。また、こんにやく糊を表面に塗布し、和紙の強度と耐久性の付加を行った。

#### c. 芋版でサコッシュに装飾

ベジタブル紙での体験を活かし、サコッシュでの芋版装飾を試みた。芋版をする対象が和紙から布に変わったことで、多少の吸水性の違いによる着色への影響はみられたが、かすれや濃淡も表現を豊かにするものであった。完成作品は、全員で1枚の大きな和紙に芋版をした時には見られなかった個々の個性が発揮されたものに仕上がった。児童による完成作品の一例を写真4に示す。なお、インクを乾燥させる時間を要するため、完成作品は次回活動にて返却した。



写真3 ベジタブル紙に芋版を施した完成作品

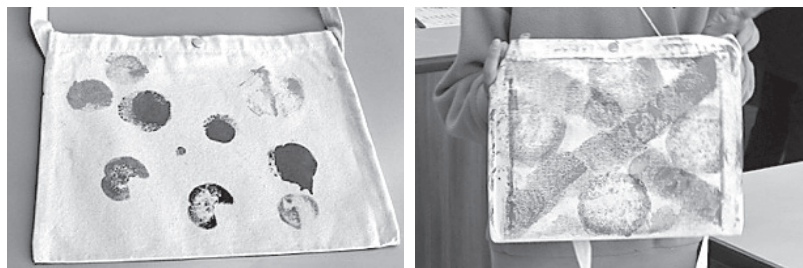


写真4 サコッシュの完成作品一例

### (3) 活動②：さつまいもの芋掘り体験と蒸しパンの調理

2022年11月19日、参加児童を9:30に大学（ポタジェ）で迎え、9:40～10:40芋掘り体験、移動後～12:30蒸しパン調理実習（5号館調理実習室）を実施した。これらの活動を順調に進めるために、学生はポタジェ班と調理班に分かれて準備した。ポタジェ班は芋掘り体験後に調理実習室まで児童を引率し、調理実習指導に合流した。

#### a. さつまいもの芋掘り体験

芋掘り体験で収穫したさつまいもは、本学のCOCOROEポタジェプロジェクトで栽培されたものである。当日は、プロジェクト指導教員及びプロジェクトの学生の協力を得た。菜園は、葉が青々と茂って、どこにさつまいもが植えられているのかわかりにくいので、事前準備として蔓を鎌で刈り取った。また、畝は硬く子どもには掘りにくいので、大きなシャベルで土をほぐし、子どもが小さなシャベルでも掘れるように準備をした。参加者（児童及び本学科の学生）は軍手を着用し、シャベルを片手に約30分間の芋掘り体験をした。様々な大きさのさつまいもが掘り出され、大きなさつまいもが見つかるとうれしがたなど、収穫の喜びを共有する時間となった。

#### b. 蒸しパンの調理

調理には、前述の通り、調理に用いたさつまいもは事前に収穫し、倉庫にて保管追熟したものを使用した。学生は実施前に試作調理を行い、4つの条件（①さつまいもを美味しく食べる、②調理作業1時間以内で完成する、③小学生も安全に楽しむことができる、④コロナ感染予防で試食はできないため衛生的に持ち帰ることができる）を満たすレシピとして「ホットケーキミックスを使ったさつまいも入り蒸しパン」を考えた。写真5は学生が児童用にまとめたレシピである。小学生でも読めるように漢字にルビを振ったり、あまり馴染みがないと思われる調理器具（蒸し器、ゴムべら）のイラストを入れたりするなどの工夫が見られた。

当日は材料の計量分配やさつまいもの下処理などの準備を整え、芋掘り体験後の児童を迎えた。全体に手順を

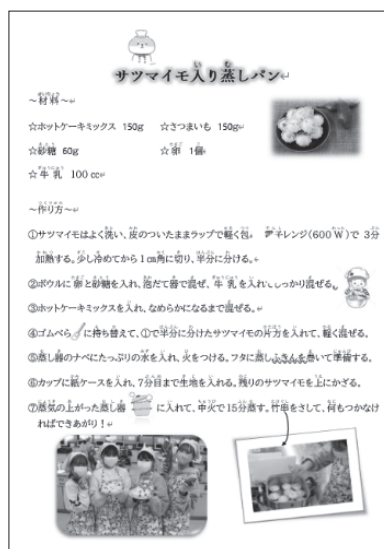


写真5 蒸しパンレシピ



写真6 調理実習の様子

a) 手順説明, b) 児童への指導



写真7 ラッピングした蒸しパン

説明した後（写真6a）、グループに分かれ調理実習を行なった。児童1グループに対し学生2名が担当した。学生は作業の流れを指示しつつも児童の自分でやりたいという気持ちを尊重し、寄り添い見守る姿勢で対応していた（写真6b）。

出来上がった蒸しパンは粗熱を取ってからラップで包み、前述の芋版を行ったベジタブル紙を用いて各自ラッピングして持ち帰った（写真7）。

#### （4）活動③：さつまいも澱粉によるオーナメント制作

2022年12月17日、活動の実施を予定していたが、施設内における新型コロナウイルスの感染児童者数が急増している状況を鑑み、交流活動を控えることになった。そのため、学生が制作したオーナメントをクリスマス飾りのひとつとしてプレゼントする企画へ変更した。以下、学生の取り組みを述べる。

##### a. さつまいも澱粉の抽出と糊作り

調理には適合しないさつまいもは、写真8のとおり、すりおろし、水に晒すことで澱粉を沈澱させ抽出した。抽出した白い粉を十分に乾燥させたのち、粉と同量の水に溶かし温めた。その結果、開始5分23秒で65℃を示すととろみがつき始め、開始6分20秒で70℃となると糊化が始まり、白色から透明感が出ると同時に粘度が増した。澱粉糊として制作に活用するには、粘度が強すぎたため、熱を加えながら水を少量ずつ混ぜ合わせ調整をし、澱粉糊が完成した。



写真8 澱粉の抽出と糊作りの工程

- 擦ったサツマイモを水にさらす
- 澱粉を沈澱させる
- 澱粉に水を混ぜ、澱粉糊を作成する

##### b. オーナメント制作

完成した澱粉糊を用い、膨らませた風船に小さくちぎった和紙を貼り付け、オーナメント制作を試みた（写真9）。

制作方法は和紙のランプシェードを参考に<sup>6)</sup>、風船の周囲に澱粉糊を塗布した和紙と芋版を施した和紙の端材を貼り付け、糊の乾燥による球形の固定を試みた。この際、部分的に穴を作り、糊の凝固後の風船の取り出し口とする。乾燥後は風船の取り出し口から内部の風船を割って風船を取り出し、周囲の紙の部分だけを残した。仕上げに取り出し口にリボンで作成した輪を通し、さらにその上から和紙で取り出し口を塞ぐことによって、吊り下げることが可能なオーナメントとして仕上げた。

クリスマス企画でのオーナメント制作であったことから、クリスマスカラーやオーナメントの意味などカラーの授業で学んだ知識を活かした学生アイデアを取り入れた。風船を取り出した直後には、市販のおかし類を封入し、見た目でも楽しめ、かつサプライズ要素も含んだオーナメントが完成した。



写真9 完成したオーナメント

c. さつまいも紙の試作

工業的にさつまいも澱粉を製造する際には、原料さつまいもの約5%の澱粉粕（乾燥重量）が生じるとされている。この澱粉粕はクエン酸の原料や家畜飼料などとして利用されているが、その他、豊富に含まれている食物繊維に注目し生分解性プラスチックや紙などの有用な素材を作るなど新たな取り組みについても研究されている<sup>7,8)</sup>。

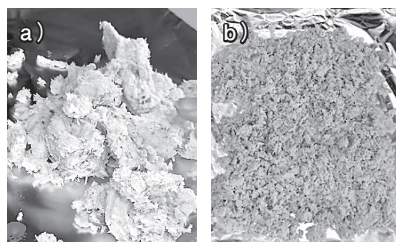


写真10 澱粉粕

- a) 澱粉抽出過程で出た廃棄物
- b) aを乾燥したもの

今回澱粉を抽出する過程で出た廃棄物（写真10a）を観察すると繊維質が確認された。それを1週間室温で自然乾燥させたもの（写真10b）を用い、紙の制作を試みた。植物の繊維から紙を作る場合、本来はアルカリ性薬剤で煮ることにより紙の原料のパルプを作る。より簡便で安全な方法として薬剤に長時間漬け込み加熱しない方法も提案されている<sup>9)</sup>が、我々は澱粉粕に残存する細胞澱粉に着目し、熱を加え澱粉を糊化することにより、粗く不純物が多い澱粉粕のまま紙にすることを考えた。紙の制作工程は写真11の通りである。

完成した紙は脆かったため、サラシ布から分離することができなかった。しかし、表面は和紙の形状をしており、紙として使用に耐え得るものと思われた。そこで、書道を得意とする学



写真11 紙の制作工程

- a) 乾燥した澱粉粕50gに水450gを加え、ペットボトルに入れて攪拌しボウルに移す
- b) 混ぜながら、70℃で5分間煮る
- c) スノコにサラシ布を敷き、その上に均等な厚さになるよう広げる
- d) 板を乗せて加重し水気を切り、新聞紙で挟んでアイロンプレスし乾燥させる

生が文字を書き、額に入れて児童へのプレゼントのひとつとする事にした(写真12)。「ゆめ」の言葉については、学生全員で相談し決定した。



写真12 さつまいも紙の作品

## 6. 学生の学習成果

学生の学習成果を検討のため、本学が導入しているPROGテストを参考に、ジェネリックスキルの2つの側面(リテラシー・コンピテンシー)のうち、コンピテンシーにおける3つの能力と9つの能力要素の調査を行った。3

つの能力は、対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力であり、9つの構成要素は対人基礎力(親和力・協働力・統率力)、対自己基礎力(感情制御力・自信創出力・行動持続力)、対課題基礎力(課題発見力・計画立案力・実践力)で構成されている。

調査は、谷<sup>4)</sup>を参考にGoogle formsを活用し、本学科学生が抵抗感なくスムーズに、かつ、正確に回答しやすいように作成したものを用いた。なお、評価は、4:優れている、3:やや優れている、2:やや劣る、1:劣るの4段階とした。分析には、統計ソフトSPSSを用い、活動の評価の差はFriedman検定を用いて検討した。なお、有意水準は5%とした。

各項目における自己評価得点の平均±標準誤差(SE)の結果を図1および表2に示す。

対人基礎力は、図1の結果から、統率力の一部を除き、2.7以上を示し、全体的に活動回数を増すたび上昇傾向にあることがわかる。以下、項目ごとに考察していく。

親和力については、活動の段階による有意差が認められた。そこで多重比較法(Bonferroni法)を行った結果、はじめとイベント②( $\chi^2(3)=9.22$ )とはじめとおわり( $\chi^2(3)=16.46$ )で有意に親和力が上昇した。学生は、「人と接しながら作業をすることに慣れてきた。」「自分たちの考えや力で様々なことを考えて作り、良いものを作れたと思いました。」と記述しており、他者と接し、意見を交え人間関係を構築しながら作業を進めている様子が窺える。次に、協働力について、約半分(6名)の学生は、活動を追うごとに協働力を高めていることが確認された。学生コメントの中にも、「皆で案を出し、協力して成し遂げると言う点で成長したと思う。」「協

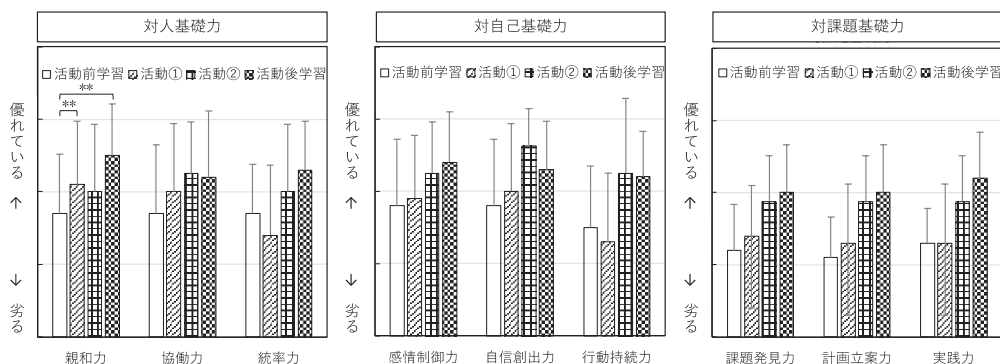


図1 活動を通じたジェネリックスキルの変化 (n=11) \*\*p<0.01



表2 活動を通じたジェネリックスキルの関連 (n=11) \*p<0.05

			M±SE	最小値	最大値	中央値	p
対人基礎力	親和力	活動前学習	2.7±0.8	1	4	3.0	0.026 *
		活動①	3.1±0.9	1	4	3.0	
		活動②	3.1±0.9	1	4	3.0	
		活動後学習	3.5±0.7	2	4	4.0	
	協働力	活動前学習	2.7±0.9	1	4	3.0	0.112
		活動①	3.0±0.9	1	4	3.0	
		活動②	3.3±0.7	2	4	3.0	
		活動後学習	3.2±0.9	1	4	3.0	
	統率力	活動前学習	2.7±0.7	2	4	3.0	0.143
		活動①	2.4±1.0	1	4	2.5	
		活動②	3.0±0.9	2	4	3.0	
		活動後学習	3.3±0.7	2	4	3.0	
対自己基礎力	感情制御力	活動前学習	2.8±0.9	1	4	3.0	0.343
		活動①	2.9±0.9	1	4	3.0	
		活動②	3.3±0.7	2	4	3.0	
		活動後学習	3.4±0.7	2	4	3.5	
	自信創出力	活動前学習	2.8±0.9	2	4	2.5	0.321
		活動①	3.0±0.9	1	4	3.0	
		活動②	3.6±0.5	3	4	4.0	
		活動後学習	3.3±0.7	2	4	3.0	
	行動持続力	活動前学習	2.5±0.8	1	4	2.5	0.063
		活動①	2.3±0.9	1	4	2.0	
		活動②	3.3±1.0	1	4	3.5	
		活動後学習	3.0±0.7	2	4	3.0	
対課題基礎力	課題発見力	活動前学習	2.2±0.6	1	3	2.0	0.189
		活動①	2.4±0.7	1	3	2.5	
		活動②	2.9±0.6	2	4	3.0	
		活動後学習	3.0±0.7	2	4	3.0	
	計画立案力	活動前学習	2.3±0.5	1	3	2.0	0.099
		活動①	2.3±0.8	1	3	2.5	
		活動②	2.9±0.6	2	4	3.0	
		活動後学習	3.2±0.6	2	4	3.0	
	実践力	活動前学習	2.3±0.5	2	3	2.0	0.059
		活動①	2.3±0.8	1	3	2.5	
		活動②	2.9±0.6	2	4	3.0	
		活動後学習	3.2±0.6	2	4	3.0	

Friedman検定 \* p<0.05

力して物事を進められた。」といった他者と協働する姿勢が窺えた。また、3名の学生は活動過程での評価は高いが、活動前後の評価が低く、その差は1～2段階の低下であった。そのため、活動後学習の結果が活動②よりもやや下回ったものと考えられる。最後に、統率力について、活動前学習では、「やや劣っている」と回答した学生が4名、「優れている」「やや優れている」と回答した学生が6名であった。ところが、活動①を体験したのち、評価の段階を下げた学生は4名もいた。学生コメントの中には、「なかなか言うことを聞いてくれない子もいたけどちゃんと最後までやり遂げられて良かったです。」とあり、思い通りに事が進まないときに苦戦し

ていた様子が窺えた。

しかし、その後、子どもの名前を覚えておき、次の活動で積極的に声をかけ、コミュニケーションをとることを心掛けたことで、活動①において評価を下げた学生も活動②の後、再び評価を上げていた。

つぎに、対自己基礎力は、図1の結果から、行動持続力を除き、2.8以上を示し、全体的に活動回数を増すたび上昇傾向にあることがわかる。以下、項目ごとに考察していく。

感情制御力については、ほとんどの学生（7名）が段階的に評価を高めていた。その他、活動前後のみ高い学生（2名）や逆に活動過程の評価が高い学生（1名）、さらには、活動後半の2回のみ評価を下げた学生（1名）もいた。活動当初の学生コメントからは、「後半全然誰1人手伝ってくれなくて1人で小さい子達の面倒見ている保育士をしている気分だった。」とあるように、その場において個人で判断しなければならない状況も現状も現状に付き合い、臨機応変に対応をしようと試みている様子と手伝って欲しい気持ちを他の学生伝えられないもどかしさ、忙しい時に連携する関係性が築けていない様子が窺える。自信創出力については、ほとんどの学生（6名）が段階的に評価を高めていたが、中には変化のない学生（2名）やイベント①以降評価が低下した学生（2名）もいた。また、イベント②までは評価が高まったが最後に評価が下がった学生も（2名）いた。その理由として、「交流活動の時に自分から積極的に困っている子などに声をかけられ、自分からも動けるようになりました。しかし、協調性があまり足りていなかった気がします。」と自分に対する次への課題が具体的になることにより評価が低くなったことが推察される。そして、行動持続力については、活動①までは低い評価であったが、イベント②から評価が高まった学生（5名）が約半数であった。「初めて会った時とは違って全体の流れがだいたい掴めてやりやすかったです。」という学生コメントにもあるとおり、回数を踏むたび、参加児童との関係性が深まり、学生の振る舞いも学生同士の連携も自分で判断しながら協働できた結果がデータに表れているものと考えられる。このことは継続的に活動を実施し回数を重ねることが、短大における実践的学習の効果を上げることにつながるという報告<sup>10)</sup>に一致する。また、こうした協働した活動は、各個人が自分の役割を理解し、それぞれ主体的な活動を担った時、発揮されるものであり、対自己基礎力はチームで活動する中で相乗的に効果が高まるというという報告<sup>4)</sup>とも一致するものであった。

最後に、対課題基礎力は、図1の結果から、全体的に低い傾向がみられた。表2の最大値に着目すると、対人基礎力や対自己基礎力の値は4であるのに対し、対課題基礎力の最大値は、活動前、活動①の段階で3となっている。以下、項目ごとに考察していく。

課題発見力は、ほとんどの学生（7名）が段階的に評価を上げた。その理由として、自ら課題を見つけ改善を図る姿勢が身についたためと考える。学生コメントには、「どうしてもより年齢の低い子に付きっきりになってしまうので、高学年の子とも沢山お話できるように心がけたい。」「待ち時間が長いと退屈そうだったのでスムーズに作業が進むようにした方がいいと思いました。」との記述がみられ、現象をただ述べるだけでなく、その対応策まで自ら考える姿勢が窺える。計画立案力は、多くの学生（8名）が評価を高めた。学生のコメントの中に、「自ら目標を立てて引っ張っていく力が大切だと思う。」という記述がみられた。このことに気付

けたことは、他人に言われることよりも説得力のあることである。

実践力は、7名の学生が段階的に評価を高めた。学生は、最初は参加児童に対し、「上手く教えられるか不安だった!」、「わかりやすい様に説明するのを頑張りました。」という気持ちをもっていたが、実際参加してみると「楽しそうに調理に積極的に参加してくれたのでよかったです。」という記述にあるように、素直に楽しむ児童の姿に励まされ、導き導かれながら自分の役割を全うした結果と考える。本学科の学生の特性として、図1からも対課題基礎力が低い傾向にある。しかし、活動を重ねるたびに上昇傾向を示したのは、活動の経験をとおして見通しを立てることができたことで、より具体的な言動を実践する力が身についたからだと考える。一般に、活動経験が少ないと、見通しを立てることも難しい。課外活動や学外活動の少ない本学科の学生がジェネリックスキルを高めるためには、継続的な活動を蓄積することが重要であり、その段階として、対人基礎力と対自己基礎力を相乗的に向上し、その後遅れて対課題基礎力が高まるという傾向があるのかもしれない。今回は『ライフデザイン実践演習』を受講した学生のみを対象としているため11名と母数が少ないが、今後の継続的な調査研究により母数を増やし、分析を進めていきたい。

## 7. まとめ

本稿では、本学科における8フィールドの学びの特性を活かし専門分野の異なる教員が協働によって、それぞれの分野を受講する学生とともに、さつまいもを主題に多様なアウトプットへと展開を試みた。また、大学近隣に位置する高鷲学園に入所する児童との地域連携活動を通して、児童へ学内でのイベントを提供することのみならず、高等教育機関での学びの特徴である探究学習を示すことができた。

このような分野横断型の地域連携活動は、学生と教員が有する知見を混ぜ合うことで新規企画の立案をおこない、イベントの実行を通して教育・研究活動による社会実装を可能とするものとする。また、児童との交流によって得た年少者に対してのイベント遂行に必要な知見は、通常の大学生活では得難いものであり、対外活動ならではの新たな学びであった。さらには、実践学習による学生の学習効果もジェネリックスキルを活用した分析によって確認することができた。一連のイベントに参加した児童にとっても、馴染みのない大学へ足を運び、学生や教員との触れ合いやイベント参加を通して、大学の一特色を感じることもできたものとする。参加児童の本取り組みでの経験が生活の中にある学びへの興味・関心に繋がることを期待したい。その結果、短期大学も含めた進学が進路選択の一つとして考える機会になるならば、余暇活動支援として実施した意義を感じる。

今後の展望としては、今回は教材として、さつまいもの収穫時からの関わりであったが、さつまいもの苗からの栽培も含めた取り組みなどにより、さらに発展的な学習に繋げていきたい。このような取り組みを継続し、分野横断型の地域連携活動の実践をさらに発展・強化をしていきたい。また、学生の学習効果測定のみならず、イベント参加者の感想やアンケートをもとに活動の有用性を検証していきたい。

## あとがき

本稿は、第1～4項、第5項 (1) (2) a,c (4) a、第6項は谷明日香、第5項 (2) b、第7項は西晃平、第5項 (3)、(4) cは谷口美佳、第5項 (4) bは西晃平、前田明美が執筆した。また、本活動を実施するにあたり、教育学科 吉田祐一郎 准教授、および、ライフデザイン学科 斎藤敏之 教授、上田知美 准教授に協力を得た。

## 謝 辞

本活動を実施にあたり、ご協力賜りました高鷲学園の教職員の皆様、および、本学の関係者の皆様に心より謝意を表す。また、COCOROEポタジェプロジェクトで栽培されたさつまいもの収穫体験とさつまいもの提供をご快諾いただき、ご支援くださいました人間福祉学科 川下維信 准教授およびCOCOROEポタジェプロジェクトの学生の皆さんにお礼申し上げたい。

## 付 記

論文中の写真掲載については、許可を得ている。

## 参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会大学分科会制度部会:“大学分科会制度部会での審議の中間的な整理” .2004.  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo\\_4/gijiroku/attach/1412879.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_4/gijiroku/attach/1412879.htm), (参照 2023.02.11)
- 2) 阿部健一 (2021)「独自性を発揮して個別化を図る ― 東京支部の地域特性、現状及び今後の方向について―」『短期大学教育』, 第77号, pp.62-69.
- 3) 吉田祐一郎,谷口美佳 (2019)「大学と児童養護施設の連携活動による大学生と入所児童の成長について-料理教室の取り組みから-」『四天王寺大学紀要』, 第67号, pp.355-368.
- 4) 谷明日香 (2022)「地域連携活動による短大生の衣服のアップサイクルの試み」『四天王寺大学紀要』, 第70号, pp.305-316.
- 5) 谷明日香 (2018)「羽曳野ぶどうの皮を用いた染色衣装による ファッションショーの取り組みと学生の学修効果」『四天王寺大学教育研究実践論集』, 第6号, pp.47-58.
- 6) 小林順子 (2004)『手作りを楽しむ 和紙のランプシェード』, 株式会社 雄鶏社, pp.38-40.
- 7) 菅沼俊彦, 北原兼文 (2008)「サツマイモでん粉の特徴と発展に向けて」『いも類振興情報』, 97号, pp.8-17.
- 8) 日本いも類研究会:“さつまいもMiNi白書 VIII多彩なさつまいもの加工利用” . [https://www.jrt.gr.jp/sprmini/sprmini\\_kako/](https://www.jrt.gr.jp/sprmini/sprmini_kako/), (参照 2023.03.06)
- 9) 小川誠 (2016)「身近な植物で紙を作る新手法」『徳島県立博物館研究報告, Bull.Tokushima Pref.Mus.』, No.26,pp.87-95.
- 10) 谷口美佳 (2019)「短期大学生における継続的地域連携活動の学習効果について-料理教室準備ゼミ活動報告-」『四天王寺大学教育研究実践論集』, 第7号, pp.91-100.